

健康文化

がん治療とセカンドオピニオン

神里みどり

がん患者と家族にとってがん治療の選択がかなりジレンマとして感じることもある。がん治療そのものが体への侵襲が大きく、ときにはその副作用で患者の生活の質への影響が考えられるからである。私の夫の場合は根治手術が不可能であったのでホルモン療法と放射線療法を主治医から薦められた。しかし、夫は根治が不可能であれば体への影響を考えて治療は控えたいということを手主治医に伝えた。主治医はこれまで自分の患者で治療の拒否をした患者はいないし、そもそもそんなことをするのは自殺行為に近いとまで話された。医師の言い分も夫の言い分も良く理解できた。特に、私の夫はこれまで大病をしたことがなく少々の風邪でも絶対に薬を飲まないできたし、健康には自信家で生きてきたので体に少しでも侵襲があることは想像を絶することであったようである。もしかしたら元の元気な体に戻れないのではないかとこの恐怖が真っ先にあったことは事実である。私自身もこれまで第三者的にしかがん患者と接してこなかったため治療の選択そのものがこんなにもストレスフルなものだとは思ってもしなかった。疾患の治療に関するあらゆる文献や本を読みあさる程、素人の私や夫にとって治療の副作用のことが大きく脳裏を離れず、もしかしたら本当に治療を受けない方がいいのではと思いはじめていた。私と何日か治療に関する話をした後、体への負担が増してきたらいつでも治療を中断すればいいのではという決断に至った。その決断に関して夫は納得をしたようで、治療を始める前にこれまで自分のやり残してきたことを整理したいと言って、自分で治療開始の月日を決めて主治医のクリニックとがんセンターで治療を受けることを決めた。しかし、なぜかその決断に関して私の方がしっくりいかず、本当に夫は納得しているのかどうか気になりだした。後からこんな治療をしたことで余計に体が弱くなってしまったなどと夫から言われるのではないかと、あるいは米国人の夫の治療は本当に日本の治療でいいのかどうか、これがベストの治療なのかどうか、いろんなことが頭をよぎり簡単に主治医の薦める治療を受け入れる勇気が私自身持てなくなってきた。生きているうちにベストの治療を受けさせてあげたい、やはり米国人の夫は米国で治療を受けた方がいいのではないかと、

そんなことを考えはじめた。そのことを夫に話をすると、米国は医療費がかなり高額で医療保険がないと医療費の支払いが困難であるので日本で治療を受けた方がベストの選択だと話した。確かにそうかもしれない。しかし、なぜか私には経済的なことがあるがゆえに日本で治療を受けることに納得をしているようで今ひとつ夫の真意がよくわからなかった。とにかく少なくとも米国のがん専門病院でセカンドオピニオンをもらった方がお互い今後の後悔が少なくなるのではと思い、セカンドオピニオンを得るために渡米することにした。

米国のがん専門病院は、やはりこれまでがん治療に関して一流と言われてきたヒューストンにあるMDアンダーソンがんセンターがいいのではないかと思い、そのことを主治医に相談した。偶然にも彼はそこで研修をしたことがあり心よく紹介状を書いてくださることになった。それ以外の全ての手続きは私と夫の方で進めることになった。MDアンダーソンがんセンターのホームページには外国からのセカンドオピニオンを受け付けてくれる部署があり、まずそこに直接電話をして何が必要なのか手続き上のことに関して詳細に教えて頂いた。最初にお金を5千ドル用意して外来に出向いたときにそれを直接支払うこと、それから全ての検査結果（病理の組織データを含む）のデータを診察の10日前までに至急送ること、その2点が要求された。宿泊先は病院とつながっているホテルに宿泊することにした。私の方も仕事に支障が出ないように他の教員の支援で3日間休みを取ることができた。子供たちの面倒は実家の両親にきってもらうことにしたが、子供たちには夫のがんのことは知らせずに急用で米国に行かなければいけないことだけを伝えた。

私と夫は診察の前日に米国のヒューストン入りをした。空港からは病院用の送迎バスがでており非常に便利であった。宿泊先のホテルは病院と廊下でつながっており病院とホテルが自由に行き来できるような構造になっていた。ホテルといっても宿泊者はほとんどががんの患者らしく化学療法を受けているのかマスクをした患者が多かった。ホテルの部屋は、ワンルームであるが長期滞在用なのか、キッチンがついていて、料理に必要な器具はすべてそろっていた。ホテル内のロビーの直ぐ横に、がん患者用の図書室や情報を検索できるPCが設置しており、そこには常時2名のスタッフが対応しており、がん患者と家族の質問に気軽に答えることができる仕組みになっていた。さらにがん患者と家族のためのセミナーや教育プログラムなどの案内も貼り出されており、宿泊者に情報が行き渡るような工夫がされていた。がんの診断のショックからまだ立ち直っていない私と夫にとっては、周りががんに関するものばかりで、可能で

あればそのことから離れたいと思っていただけに、診察前後は利用する元気もなく、むしろ避けていたような気がする。その図書室を利用したのは診察終了後の滞在の最終日で、がん患者や家族のためのパンフレットや著書、ビデオなどがかなり充実しており、もう少し時間があればじっくり利用できたのではと少し後悔をしたしだいである。

病院の外来へは8時に手続きをするように言われていたので、ホテルと病院の渡り廊下を歩いて外来へと向かった。病院内のエレベータの中には、何種類かの言語を話すスタッフがいるのでいつでもヘルプできますと書かれたポスターが貼ってあり、その中に日本語も含まれていて、いろんな国の患者に対応できるようにしているのはすばらしいと思った。夫は日本語が話せないので、少しでも私と主治医が日本語で話そうものなら何を話しているのか(話している内容が全く理解できないので)と怒り出すので、必ず主治医には英語で話して頂いていた。言葉が通じないということは患者にとって恐怖の何ものでもないと感じている。そういう意味では日本の主治医の先生には英語で毎回親切に説明して頂けたことは心から感謝しているし、夫もそのことに関しては非常にありがたく思っていたようである。

外来では、まずお金の支払いを要求されてその手続きに30分ほどかかった。それから9時頃になってようやく看護師による採血や体重、身長、バイタルサインなどの基本的な処置がなされた。その後、すぐに診察室に案内されたが、1時間経っても医師は現れず、何度か看護師に尋ねたが待っていなさいとしか言われずそのまま待っていた。するとやっと医師らしき方が診察室に入ってきたが、ネームプレートを見ると医師ではなく、医師補助者 PA(Physician Assistant)で、頭のとっぺんからつま先までと言われているフィジカルアセスメントが施された。最後に直腸診も実施されたが、体位が日本で通常行われている側臥位ではなく、立位でベッドに上半身のみ伏せた体位で直腸診が施された。アセスメントの前にはかなり詳細な問診がPAによってなされ、その中でも性行動に関しても聞かれたので日本ではそのような問診はなかったので文化の違いを感じたが、重要な項目であると思った。特に、欧米人は男性ホルモンを抑えるためのホルモン療法への抵抗が強いと文献などに書かれており、まさに私の夫もそうであったので、人種によって問診もそれを考慮した配慮が必要ではないかと思った。

さて、PAの問診とアセスメントが終了しても全く医師が現れる気配がなく、病院に来院してから4時間が過ぎようとしていた。日本の病院でもこんなに待たされたことはなかったので夫はかなりいらいらし、あまりにも長時間待たさ

れたことに関して怒り、もうセカンドオピニオンはいらないから帰ると言いだし、今にも診察室をとび出しそうな勢いであった。私はもう少し我慢しようと夫をなだめながら、忙しそうな看護師をつかまえて、いつになったら医師が現れるのかと何度か尋ねたが、もう少し待つようにとしか返事がなかった。ようやく医師が診察室を訪れたときには、待ち時間が5時間ほどになるろうとしていた。医師は長時間待たせたことに関して一切なんの説明もなく、再度医師によって直腸診がおこなわれた。最初に来室したPAはきちんと座って私たちとじっくり向き合って聞く態度であったが、医師は立ったままで診断結果の説明を始めたので私たちにとっては、その医師の印象は非常に悪かった。診断結果と治療方針は日本の主治医が示した方向性とほぼ同じであった。少し異なっていたのは、放射線量の線量が日本と比較して高い線量になっていたことである。日本の全体の放射線量は68グレイであったが、米国では74グレイで設定されていた。その医師からは高線量の方が治療効果が高いこと、またすぐにホルモン療法を始めたほうがいいのでこれからすぐに始めたほうがよいと言われた。しかし、夫はやりたいことがあるのでそれが終了してから始めたいと言ったので、その医師はすぐに始めないといい結果にならないのにとやや不満そうな表情をしていた。いずれにしても診断結果や治療方針がほぼ同じであったのでまずは私も夫も安心し、日本で治療を受けることにゆるぎない決心がついたことは確かである。何時間も待たされ、医師の印象も決して良いものではなかったが、セカンドオピニオンは時には必要だと痛感したしだいである。それから夫は1ヵ月後やり残したことを終え、がん腫瘍縮小のためのホルモン療法を始めた。しかし、5ヶ月して体調不良や肝臓への副作用が出現し、医師は続けた方がいいという判断であったが本人の意思で治療を中断した。治療の中断に関して本人も非常に迷ったようであるが、私もこれ以上体調が悪くなっていくのを見るのもつらくなったのでその判断もいいのかもしいかなと思った。そう、夫の体調は本人でしか知りえないからである。これまでがん治療は絶対に受けた方がよいと信じきってきた私であるが、夫の経験を通してやはり本人の意思にゆだねるのが一番ではないかと思ってきた。長生きはだれでもしたいと思うが、生命の質を下げてもその決断をするかどうかは本人の意思が強ければ本人にゆだねる方がベストではなかろうか。この決断でよかったのだと思いたい。

(沖縄県立看護大学大学院教授)